

## 《小論》自らが使う言葉の意味を明確にする

### 相手を最適に理解し、主張を最適にする

(株)シードウィン info@seedwin.co.jp

言葉のよりどころはどこにあるのかははっきりとしない。日常の習慣、伝達できる範囲と可能性で、言葉の意味を感じ取っている。

一つの単語の意味を定義しようとして、資料等々を取り出し、または該当単語が多く使われている論証を調べても明瞭になり難い。国語辞典も引っ張りだす。

自身が使っている単語の意味が明確でなければ、主張は明確にならない。当然、相手を説得できない。言葉の意味が明確でなければ、向き合っている相手の言っている意味を理解しきれない。何度も相手の言葉を交わして、相手と自分の言葉の意味を交換して、理解し合える。

自身の僅かな知識と、僅かな経験を頼りに、自身の言葉を組み立てる。使っているたくさんの単語の意味にバランスを持たせる。自らの主張も、相手への理解も、言葉から始まっている。

主張、説得、相手の理解の広さと深さは、自らが持つ言葉の深さと比例する。

——国語辞典は、言葉の意味を知るためにあるのではない。言葉を使うためにあるのだ。

国語辞典から始まって、自身を、相手を、社会を、世界を理解するために、言葉がある。様々な場所で、様々な人が、自分の言葉で語る。

共通とされる意味から始まって、複数の単語がつながって、気付きが産まれる。産まれた気付きから、新たな視点が生まれ、もしかしたら、思いもしなかった挑戦が始まるかもしれない。たくさんの人の言葉が集まって、最大公約数的な意味が辞典に載っているはずだ。

——言葉は自由なのだ。

如何なる言葉を作り出したとしても、作り出した言葉の許可を誰かにもらう必要もない。自分の中に浮かんだ文字を綴って新しい単語を作り出したっていい。但し、他の人に伝わらなければ言葉の意味がない。できるだけ多くの人に、できれば、すべての人に伝わる必要がある。

私たちは言葉を紡ぎだすための、みんなが知っている単語を持っている。結構、たくさん持っている。だいたい20万語程度だろうか。20万語の全部を言えるわけもないが、どこかで聞いているだろう。

日常は、もっと小さな、狭い単語の世界で生活をし、仕事をしている。せいぜい、三千語から五千語位だろうか。それぞれが自分の三千語の世界だから、皆が同じでもない。ただ、二十万語ぐらいいは聞いたことがあるから、違う世界の人と話をしても、分かり合える。

語群が国語辞典に載っている。辞典には、携帯用で六～八万語、中辞典で二十数万語程度載っている。大辞典では五十万語ほどある。

外来語が日々に入ってきて、浸透していく。外来語としての日本語になって、元々の母

国語の意味が変化して、日本の風土、習慣と馴染んで、別の意味を示す場合もある。単語数は、日々、増えているが、新たな意味を持つ場合は少なく、類語として増えていく。その意味では、科学用語を除けば、急激な増加はないのかもしれない。

推定でしかないが、数万語＋専門用語で、一つの業種が構成されているかもしれない。

——辞典の意味は、すべての人と共通するはずの意味が載っている。

単語を説明するのに異なる他の単語を使う。説明に使った単語もまた、辞典に載っている。語釈で使われた単語を次々に繋いでいけば、辞典の見出し語に現れた単語数を超えるかもしれない。もしかしたら、大辞典の語釈をすべて集めて分析すれば、一定以上の頻度数の単語は限定されるかもしれない。そうであるならば、母国語での日常的な主要単語が絞り込まれて出てくるかもしれない。機会があれば実行してみたい。

例えば、全国紙五紙の社説で、一ヶ月間に使われる文字数は約二十六万文字ある。使われている自立語（助動詞、助詞を除く）は重複を含めて約七万一千単語である。使われた自立語の種類数は約一万五千語である。

一万五千語があれば、一ヶ月の約 270 社説を表現できる。政治、経済、産業、金融、外交、社会、文化等々の分野について、現在を表現できる。社説を理解するための辞典を作るとすれば、一万五千語＋五千語位の辞典で良いかもしれない。

そんな辞典は、専門系では「たくさん」存在している。

もう一つ、異なる視点からの例を挙げてみる。

「たくさん」を辞典で調べてみると、「**数や分量が多いこと**」「**十分なこと、これ以上はいらないこと**」とある。

「たくさん」と「多い」は、同じ意味であって、たくさんの語釈になっているか疑わしい。「十分」も、やはりどの程度十分なのかも分からない。辞典の語釈を掘り下げて考えてみれば、語釈が却って分かり難くしているかもしれない。

「中正」が辞典に載っている。語釈は「**立場が一方に偏らず正しいこと**」とある。

「一方」があるのだから、「他方」があるはずである。「一方」と「他方」は、相反しているのだろうか。それとも、「一方」も「他方」もたくさんあって、「一方」の中で、類似しているのだろうか。

類似の枠組みは、どのように定められているのだろうか。「正しい」としたのが中間であれば、正しいと判断できるのだろうか。「正しい」の意味は何だろうか。語釈では「**道理や法に適っていて誤りがない**」とある。この表現は、「右」を説明するのに「左でない方」とするのと同じなる。

辞典で挙げられている語釈を一つ一つ取り出していくと、定め難い事柄が次々と出てくる。何が適切であるかは分かり難い。適切である、正しい、と信じるのみかもしれない。

辞典はすべての人の共通性を確認するためにあるのではなく、**大量の混迷のバランスをまとめている**のかもしれない。

——「正しい」「間違いはなく普遍的である」とされるモノを積み上げるのは容易い。

正しいモノを積み上げても狂いはなく正しい。もちろん、正しいモノを見いだすのは困

難である。言葉の意味は変化する。時代、場所、状況、同じ時と場所でも、人の立場によって意味の大切さが変わる。同じ人でも、時と環境、立場が変われば言葉の組み合わせが変わる。知識の分野や程度によっても単語の意味が変わる。

変化要素の多い環境から、大半の人が一応納得できる語釈を何十万単語の用意するのだから辞典編者は大変である。結果は、「大量の混迷のバランス」が正しいとなる。

さて、自分が言葉を綴るとき、他の人の世界には入っていけない。自分の意味を他人に強制できないのだから。入れるとすれば、その人の世界の語句を、その人と同じように扱えなければならない。家族では、同じ言葉の世界で話し合うから、互いに分かり合える。すれ違ったとしたら、言葉の世界でズレが生じたのだ。子供が成長してきて、通じない時があるとしたら、親の知らない語群を獲得したに違いない。言葉と一緒に価値観も、考え方も取得したのだ。

仕事も同じで、同じ語群の中で会話をする。お客様とお話しをするとき、お客様と、自身と共通の語群の中での話しになる。ソクラテスの言う「大工に話すには大工の言葉を使え」である。

知っている語句、使い慣れている語句の世界で、仕事をし、考える。だから、その人が使っている語句を全部取り出したら、その人が分かるだろうと想像できる。

人は、専門用語を除けば、たいていの単語を知っている。国語辞典程度には理解しているし、使える。しかし、「混迷のバランス」の中から取り出してきた数百の単語を使った話題では、使っている人の意思と思想が盛り込まれている。既に辞典の単語の意味の色合いが変わっているのだ。単語の語釈に深味が増し、複数の単語を使って個人のユニークな意味が表されている。

何人もの人が、同じテーマで文章を書いたとしても、同じ内容には決してならない。

もし、同じ内容になっているとしたら、その人たちは個人を忘れて、自らの思考を捨ててしまったのだ。就活時のエントリーシートの文章を読むと、自らの思考を捨て去った人たちが多くのように見えてしまう。

——話す時、文章を書く時、自らが使っている単語の意味をほとんど考えない。

自然に伝えたいと思う事柄のために単語が連なって出てくる。それまでに知っている単語の範囲で行われる。その時までには解釈されている単語の意味で表現される。

単語の意味は辞典の中ではバランスが取れているが、僅かな単語を取り出して組み合わせると、矛盾とまでは行かなくてもズレが生じる場合がある。

「盾と矛をひさぐ者あり一矛盾」は、状況認識と相関関係を無視したために起こった。

「大きな茶碗を入れる小さな箱」と表現した場合、始めの「大きな」と後の「小さな」は基準が違っているはずだ。もし、「大きな」と「小さな」の基準が同じであるとしたら、箱に茶碗が入るはずもない。適切な表現のために、状況、相関・相反、基準の関係が明らかにされていなければならない。

——国語辞典での語釈は、すべての人にとっての共通の意味である。

辞典に広義または狭義としたうえでの語釈がある。どちらにしても、すべての人にとっ

ての意味であるが故に、最適とされる意味であると断定できないかもしれない。  
子供、学生、社会人、個人事業主、企業人、科学者、医師、教師、芸術家、等々、そして年齢、性別に関わらず、通じるはずの語釈である。  
漠然と使われている意味であって、目的を持った意味、価値を示した意味にはなり難い。  
表現するとき、単語の意味を使う者が明確にしている円滑な伝達が行われる。  
具体物であれば指定しやすく間違いは生じにくいだが、抽象語であれば、立場、状況、相関・相反、基準を明らかにしておかねばならない。

——新選国語辞典（小学館 2011年十九版）から「情報」を取り出した。

「事情についての知らせ」「何等かの知識を与えるもの。知らされる内容。インフォメーション」

国語辞典の語釈は、主体と目的を考えずに、単語の意味だけを表せばよいとするならば、情報の語釈は正しいのかもしれない。但し、情報は一過性で、受け取る者にとって、情報の価値が産まれてくる。価値がなければ、情報だとされているモノに気付きもしなければ、注意も払わない。

情報は意思決定、行動変化に関わる。主体と目的を除外し「事情についての知らせ」とし、発展させれば「何等かの知識を与えるもの」は当てはまる。しかし、知識は情報ではない。語釈を簡潔にしていくとき、言葉の意味の適切が失われていく可能性がある。情報に有効情報とそうでないものがある。有効でない情報は、情報ではないとすれば、情報の語釈が違っている証になる。

辞典の語釈は、多くの人が使っている意味が掲載されている。少しずつの意味の変化が、単語の元の姿を消してしまう恐れがある。死語になった単語の意味は、変化しない。変化しないが使われていない。国語辞典としての役目も果たし得ない。

国語辞典の語釈は、適切だろうが、掲載を確定するまでに、多くの人々に認識されていなければならない。掲載されるために単語が挙げられ、意味が整理され、掲載された時には、時が進んでいる。既に意味の変化が始まっている。

国語辞典の読者にとって、語釈は単語と関わる始まりである。出合ったときから、単語の意味を自分なりに、立場に対して検討しなければならない。

——同じ辞典で「経営」「経済」「仕事」「マネジメント」を取り出してみた。

「経営—計画に基づいて、経済の成り立つ運営をおこなうこと。」

「経済—人間の共同生活に必要な物質・財産を生産・分配・消費する活動。個人の生活における金のやりくり。」

「仕事—すべき勤めを果たすために働くこと。業務、職業。生活をしていくための金を得る手段。職業。仕事率—単位時間にする仕事の量。」

「マネジメント—会社・官庁などの組織体において、一定の目的や方針を合理的に実現するために、下部を指揮・監督すること。管理。」

四単語の語釈を並べてみると、ちょっとした時代錯誤に陥る。

産業革命以降、産業の形態が急速に変化してきた。1900年初頭、フレデリック・テイラーが科学的管理法を提唱した。仕事に知識を加えた。道具、仕事の手順に知識を応用した

のだ。同じ頃、大学卒が、大学卒として組織に初めて採用された。

第二次世界大戦中に、未熟練者に高度技術を必要とする作業を分業することで、できるようにした。生産革命である。知識が生産に応用された。

第二次世界大戦が始まる前に、1930年頃、知識社会が言われるようになった。そして戦後、知識が知識に影響するようになった。マネジメントが登場する。

大量生産から、多品種生産に変わった。肉体労働が減り、知識労働が拡大していく。肉体労働比率は20%より小さくなりつつある。日本では、2009年に大卒者が50%を超えた。

知識を活用する仕事に対して、管理はしにくくなった。労働形態、雇用形態が多様化して、依頼はできても指揮が出来ない部分が増えてきた。知識労働者は、コントロールされることを嫌う。1980年頃からマネジメント・シフトが起こった。

語釈は1970年以前のようなだ。

——広辞苑の版別に「マネジメント」を追ってみた。

「マネジメント」は1941年『辞苑 352版（博文館）』には掲載されていない。

「仕事」は「なすこと、する業、職業。」「はりしごと、裁縫。」とある。

☛仕事は、コツコツと類似した動作を繰り返していくことを示していたのだ。他の職種は、仕事の単語に適応されにくかったのかもしれない、職種そのまま表す確率が高かったのかもしれない。大工、弁護士、雑貨屋、呉服屋、魚屋、等々。

☛「辞苑」は広辞苑の前身とされている。

「マネジメント—管理。支配。経営。」1965年第一版十五刷

「マネジメント—管理。支配。経営。」1969年第二版一刷

「マネジメント—管理。支配。経営。」1978年第二版補訂版

「マネジメント—管理。処理。経営。」1990年第三版八刷

「マネジメント—管理。処理。経営。」1994年第四版四刷

「マネジメント—管理。処理。経営。経営者。経営陣。」1998年第五版四刷

「マネジメント—管理。処理。経営。経営者。経営陣。」2008年第六版一刷

1965年から2008年まで、マネジメントの意味は変化していない。時代は変化しているが、語釈が変化していないのは何故だろうか。

人の移動、情報の移動の範囲が狭く、頻度が少なかった時代は、言葉の変化には年数がかかった。戦国時代以前では、言葉の変化に160年ほどかかっていた。江戸時代に入って参勤交代が定期的に起こって、速度を増すが、70年以上はかかっていたのではないか。海外からの刺激が小さかったから、国内全体に広まると変化しにくい。明治時代から第二次世界大戦までは、大きな変化の時代で、言葉変化としてはひとくくり出来る。戦後は2000年までに数度変化しているようだ。2000年以降、5年周期程度に変化している。

発生と浸透を考えれば、速いと思える。しかし、辞典の変化はかなり遅いようだ。

「マネジメント—経営。管理。経営者。管理者。」『明鏡（大修館書店）』2011年第二版最近だされた辞典も類似した語釈になっている。

「マネジメント」については、調べた国語辞典の範囲では半世紀ほど遅れているようだ。

——当社が「マネジメント」の語釈をするとすれば、  
《組織人全員に、使命、目的に対して、各人の能力と知力を最大限に発揮してもらい、最適な活動と成果を成し遂げてもらうための知識と技術である。》とするだろう。  
「マネジメント」を、数学や生物学の語釈のように、科学として説明する。

私たちは、言葉を使って意思を通じ合う。説得をし、理解しようとする。モノを理解し、新たなモノを組み立てる。私たちが知り得たことを、言葉の体系を使って、後世に伝える。不可解な事柄を、言葉を使って整理し、言葉を使って考え、混沌から抜け出す。

当然、表された文章、言葉を検討すれば、表した人、組織を解析できる。確かな事柄、曖昧さ、偏り過ぎた考え、バランスの良さなどが分かる。

——もし、国語辞典がなかったら、混沌から抜け出す方法がなかったかもしれない。

行き交う人々はみんな言葉を持っている。自身が普段使わない言葉を持っている。全体で、どれほどの言葉があるのか想像もつかないだろう。

国語辞典を編纂した人たちは、漠として分からない言葉を拾い集めた。一単語ずつ、聞き耳をたて、様々な本を読み、拾い集めてきた。何年もかかって、何人もの力を合わせて50万語を超える大辞典を編纂した。そして、日常に使われる単語群を7~8万語に絞り込んだ。少なくとも、日常に使われる単語を選びだし、語釈を加えた。日常の言葉がそこにある。言葉に迷うことはない。

言葉を集める作業は、淡々としている。毎日毎日拾ってくる。その人たちの努力があって、私たちの言葉の始まりがある。

しかし、辞典が超えられないところがある。明日を表せない。明日の語釈はできても、明日を、国語辞典は語らない。明日を語るのは私たち自身である。

言葉は変化する。変化の一端を私たちの活動が担っている。言葉の意味を深め、生きたモノにするのも私たち自身である。

辞典から始まって、現在と照らし合わせ、自らの行動を完成させる。

そのために、自分たちの語釈が必要になる。考える材料が必要になる。方向を間違わないようにするために、自分たちで考えねばならないのだ。

——私たちは、仕事を進めていくために、ブレがあってはいけない。

矛盾が生じてはならない。未来を創っていかねばならない。そのために国語辞典から始まって、自らの仕事と社会の進歩を組み合わせ、言葉の意味を定義する必要がある。自らの言葉の定義である。そこに、未来への方向がある。

仕事には、二種類の知識が必要である。一つは職種を全うするための専門知識である。他の一つは専門知識を最大にして最適に活かすための知識である。この知識を活用のブレをなくすために300単語を取り出した。その300単語を定義するための材料となる単語を表した。『思考整理単語集』である。参考になればと願う。サンプルは『サービス案内—デジタル書籍』に記載した。

#### 参考資料

・新選国語辞典（小学館）2011年十九版 ・明鏡（大修館書店）2011年第二版 ・岩波国語辞典（岩波書店）2016年第七版五刷 ・辞苑（博文館）1941年352版 ・広辞苑（岩波書店）1965年第一版十五刷 1969年第二版一刷 1978年第二版補訂版 1990年第三版八刷 1994年第四版四刷 1998年第五版四刷 2008年第六版一刷